「聖書の中心で愛を叫ぶ」

ヨハネによる福音書 3:16−21

2025年6月29日
野村 友美 師

＜聖書の中心＞

「神は、その独り子をお与えになったほどに、
世を愛された。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、
永遠の命を得るためである。」

このイエス様の言葉は、キリスト教会では「聖書の中心」と呼ばれています。旧約聖書の創世記から新約聖書のヨハネの黙示録まで、聖書が伝えているありとあらゆることの、核になる部分。
いちばん大事なことが、今日のイエス様の言葉なんです。

神様の独り子が、私たちのこの世界に与えられた。つまり「神」が、私たち人間の真っただ中にやって来られた。この驚くべき出来事の理由を、張本人である「独り子」、イエス様はこう言っておられます。神様が「世」を愛されたからだ、と。世、つまり神様がお造りになったこの世界を、命を与えたすべてのものを、神様が愛しておられるから。

「同じ場所で生きて、喜びも悲しみも辛さも一緒に味わおう」と決断するほど、神様が人間たちを愛されたから。
神様の独り子は一人の人間になって、この世界の真っただ中に飛び込んで来られた、というんです。
それだけじゃありません。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため。そんな神様の目的も、イエス様はここで伝えておられます。

神様はただ、私たち人間と一緒に生きるために、私たちのところにやって来られただけじゃありません。愛する一人ひとりを、誰も失わないために。神様と一緒に生きる新しい命を、すべての人に与えるために。神様は独り子イエス様を、愛するこの世界にお与えになったんです。
同じ場所で向き合って、目に見えて、声が聞こえて、その存在を確かに感じることができる、神様の愛の証拠として。イエス様はこの世界の真っただ中に来られて、すべての人に神様の愛を見せて、
聞かせて、実感させて、神様と一緒に生きる命へと招いておられるんです。

＜神の国の命を生きる＞

どうすれば、神の国で生きられるか。
何をしたら、神の国の命が手に入るか。
この質問を抱えて訪ねてきたニコデモという人に、イエス様はお答えになりました。
新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない。新しく生まれなければ、誰も神の国の命を生きることはできない。
自分勝手にふるまって神様を悲しませてしまう、そんな自分の罪を認めて、それでも愛し

てくださっている神様に信頼して、新しい生き方に踏み出しなさい。そうイエス様は、ニコデモに伝えたんです。

ここでイエス様が言っておられる神の国、永遠の命というのは、私たち人間が死んだ後だけのことではありません。そのことを、今日のイエス様の言葉は語っています。

神様が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなくて、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者はすでに裁かれている。

何だかややこしく聞こえるかもしれませんが、イエス様は「わたしは人間たちを裁くために来たんじゃない、救うために来たんだ」と言っておられるんです。

イエス様を信じて、神様の愛を信じる人は、今この時も安心して神様と一緒に生きることができる。神の国の命を確かに感じながら、今を生きることができる。そうイエス様は宣言しておられるんです。

今日、この後ご一緒に「主われを愛す」という賛美歌を歌います。主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらじ。

主イエス・キリストは、わたしを愛してくださっている。弱くて小さなわたしでも、イエス様がしっかり支えてくださるから、何も怖がらなくていい。そういう賛美歌です。

もちろんイエス様を信じているからといって、病気にも事故にも災害にも遭わないで、平穏無事に生きられるわけじゃありません。信仰があろうとなかろうと、私たちの人生にはいろんなことが起こります。嬉しいことや幸せなことだけだったら素敵なんですが、理不尽な苦しみや悲しみ、

悔しさ、怒りにも、何回だって出会わされるでしょう。

神様が愛しておられる自分自身も、他の誰かも、大切にしきれない私たち人間の罪は、お互いを傷つけ合って、いつもどこかで争いを引き起こしています。そして弱い立場に置かれている人が、いつだってその争いの犠牲になっています。

病気や死は誰に対しても、どうしようもなく襲いかかってくるものです。

「神様、どうして？」と問いかけずにはいられないことが、この世界には、私たちの人生には溢れています。

それでも、独り子を差し出してくださったほどの、神様の愛を信じるなら。

神様から私たちへの愛の証拠、イエス様を信じるなら。私たちの真っただ中に来て、顔を合わせて向き合ってくださる神様に、私たちは安心して頼ることができるんです。

神様が愛してくださっているんだから、絶望しなくていい。この苦しみから、悲しみから、怒りから、神様が必ず助け出してくださる。

この体の命を生きている間も、生き終わって

死を迎える時にも、愛してくださっている神様に、安心して私をお任せできる。この「救い」を信じる人はすでに、神様と生きる新しい命を受け取っているんです。

＜聖書の中心で愛を叫ぶ救い主＞

　この「救い」がなかったら。
神様の愛があてにできなかったら、私たちが生きているこの世界はどんなにか恐ろしくて不安で、気が抜けない場所でしょうか。
「信じない者はすでに裁かれている」とイエス様が言われるのは、そういうことです。
神様の愛以外のもので自分を安心させるために、人間はどこまでも自分勝手で、残酷になることができてしまいます。
今、ガザとイスラエル、そしてイランとアメリカで、あるいはウクライナとロシアで、
この世界のあちこちで起きている争いは、まさにその最たるものでしょう。
戦争や紛争だけじゃなくて。私たちが生きているこの社会の中でも、日常生活の中でも、それは決して珍しくはありません。
必要以上の豊かさや、誰かを支配する側に立つ安心感、「自分こそ正しい」と正当化する理屈。
そういうものを手に入れるために、他の誰かを踏みつけたり騙したり、欲望にまかせて奪い取ってしまう薄暗さを、私たち人間は多かれ少なかれ抱えています。
もちろん、それが堂々と他人に見せられるようなものじゃないことも、私たちはよくよく知っているでしょう。
だから、自分の中の薄暗さを知られそうになったら、必死になって言い訳して、時には開き直って、何とか自分で自分を救おうとします。
そんな薄暗いやましさは、抱えている自分自身がいちばんしんどいものです。

　反対に、誰かを愛するということは、私たちの心を温かく満たしてくれます。愛おしく思う相手、たとえばパートナーやご家族や、大事な友だちが喜ぶ顔を思い浮かべてみてください。皆さんの顔にも自然に、嬉しさがにじんでくるでしょう。
誰かを大切にする時、誰かを愛おしいと感じる時、誰かのために行動する時。きっとその「誰か」よりも、私たち自身が幸せで、晴れやかな気持ちに
なっているんじゃないでしょうか。
それが特別な相手じゃなくたって、誰かを喜ばせたり助けたりすることは、私たち自身の心を明るく照らしてくれます。
だからこそ、すべての人を愛して大切にしておられる神様に従うことは、私たちを薄暗いしんどさから、温かい光の中へと導き出してくれるのです。

　とはいえ、愛しやすい人は愛せるけど、どうしても愛せない人も、私たちにはいるでしょう。

それは本当に自然で、当たり前のことです。
同じ人のことでも、愛せる時もあれば、愛せないと思う時だってあります。愛して大切にするフリだったら、できるかもしれません。でもそんな時はきっと、私たちの心の中は薄暗いままです。
だから「愛しているふりをしろ、偽善者になれ」なんてことはイエス様は言っておられません。
神様の愛に従うその行いは、神様が導いてくださるものだと、イエス様は今日の言葉の後に教えています。
「愛する」ということは、自分の思いとか感情を押し殺して、自分の力でできるようなことじゃありません。「愛する」というのは、新しく生まれるのと同じことなんです。
愛せない、愛しきれない自分の弱さを認めて、丸ごと神様に差し出して、「愛させてください」と祈るなら。神様は必ず私たちを、新しく生まれさせてくださいます。

愛せない者から愛する者へ。

薄暗い罪の闇から、温かい愛の光へ。

孤独に滅び去る死から、神様と一緒に生きる命へ。

神様が私たちを、愛のまっただ中に導き出してくださいます。

「そのためにわたしは来た！」と神様の独り子が、聖書の中心で叫んでおられるんです。
今日、私たちは改めて、イエス様のこの愛の叫びを受け取ろうではありませんか。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、
世を愛された。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、
永遠の命を得るためである。」

聖書の中心でイエス様が叫ばれた、この神様の愛を信じて。今この時も、神様と一緒に生きていることができますように。
罪の薄暗さ、しんどさに覆われているすべての人に、このイエス様の愛の叫びを届けることができますように。
「愛させてください」と神様に祈りながら、私たちはここからそれぞれの場所へ送り出されていきましょう。お祈りいたします。